

# 阿波國府跡第10次調査概要

— 1 9 9 1 年 度 —

1992. 3

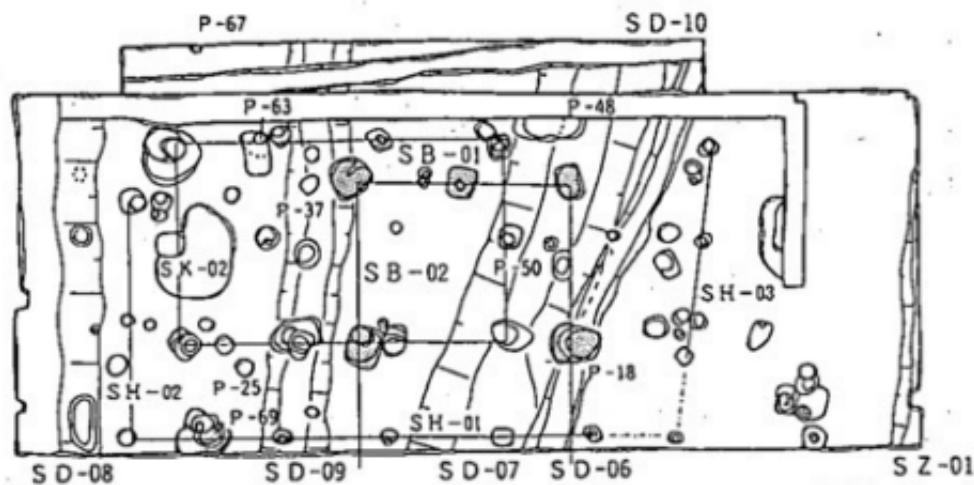
徳島市教育委員会



# 正誤表

頁-行	誤	正
7-30	01, <u>01</u> , 03	01, <u>02</u> , 03
10-9	図版5	第7図
10-19	C区	III区
14-1	C区	III区

第3図の一部を下のとおり訂正します。



阿波国府跡周辺地域 「字名」 図

付図



推定府域（方6町域）

# 阿波國府跡第10次調査概要

— 1 9 9 1 年 度 —

1992. 3

徳島市教育委員会

## 序 文

国府は、奈良時代に国家機構が中央集権的に組織化されていくうえで、その基幹組織として全国に設置された地方行政官庁です。

阿波国府は、今日でも地名として残っておりますように、徳島市国府町府中、観音寺あたりを中心に造営されていたと推定されており、県下でも最大級の重要遺跡として位置づけられています。

昭和57年度より国庫補助を受けて継続してまいりましたこの阿波国府跡の重要遺跡確認調査も、本年度で最終の第10次調査をむかえました。

国府は、通常、方6町域とも方8町域とも推定される規模の壮大さ故に、阿波国府に関しましても未だその全容は確認できていません。しかしここれまでの継続調査において、観音寺を中心とする地域で国衙跡を思わせる建物跡や膨大な量の遺物が出土するなど、阿波国府の研究にとって重要な成果を得ることができました。

これもひとえに、地権者の方々をはじめとする地元の方々の調査に対する御理解・御協力、ならびに研究者の方々の御指導・御助言の賜であると感謝いたしております。10年間の調査を終えるにあたり、あらためて心より厚く御礼申し上げます。

平成4年3月31日

徳島市教育委員会  
教育長 小林 實

## 例　　言

1. 本書は平成3年度に国庫補助を受けて実施した阿波國府跡発掘調査（第10次調査）の概要報告書である。
2. 発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり実施した。また事務的処理については、事務局として社会教育課が執り行った。
3. 発掘調査は徳島市国府町観音寺466-1, 623-1, 624-1で合計600m<sup>2</sup>を対象に実施した。
4. 調査期間は平成4年1月16日から同年3月31日までである（整理期間を含む）。
5. 調査は三宅良明（徳島市教育委員会社会教育課主事）が担当し、期間中下記の方々に参加いただいた。

調　　査　員　　市川欣也，倉佐晃次，佐伯俊裕，高木　淳，中野勝美

調査補助員　　秋山一秋，秋山　肇，伊丹理晴，井村佳宏，板橋トシ子，梅津　勤，岡田圭司，小林チエ子，武知敏子，中村　宏，藤崎コフジ，藤崎静枝，藤崎美智子，美馬邦子，宮崎栄子，盛　喜八，森口郁江，矢本アサ子，幸田笑子，渡邊　功（順不同，敬称略）

6. 調査にあたっては、地権者である兼松　幸，坂東嘉子の両氏をはじめ地元の方々から多大な御協力を賜った。感謝の意を表したい。
7. 調査期間中、島巡賢二氏からは多くの御教示をいただいた。
8. 遺構の実測は、調査員と伊丹理晴，梅津　勤，岡田圭司，渡邊　功の9名が分担して行った。
9. 遺構実測図トレース，遺物実測および実測図トレース，写真撮影は三宅が行った。
10. 本書は三宅が執筆・編集した。

## 凡　　例

1. 本書中第1図は「石井　1:25,000」（国土地理院）を、第2図は「徳島市現況平面図1:1,000」（徳島市）を転載し、一部削除・加筆した。
2. 表示のない方位矢印（第4， 5， 9図）は真北をあらわす。
3. 遺物実測図の土器断面部は、須恵器を黒塗りとし、土師器を白抜きとした。

# 目 次

序 文

例 言

凡 例

本文目次

1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の概要	
(1) 二反田地区の概要.....	4
(2) 神明地区の概要.....	14
3. 小 結.....	16

挿図目次

図版目次

## 挿 図 目 次

第1図	発掘調査地点周辺地形図	1
第2図	調査地位置図	3
第3図	二反田地区遺構配置図	5 ~ 6
第4図	掘立柱建物S B - 01	8
第5図	掘立柱建物S B - 02	9
第6図	二反田地区出土遺物（1）	11
第7図	二反田地区出土遺物（2）	12
第8図	二反田地区出土遺物（3）	13
第9図	神明地区調査区概略図	14
第10図	神明地区トレンチ土層概略図	15
第11図	神明地区出土遺物	16

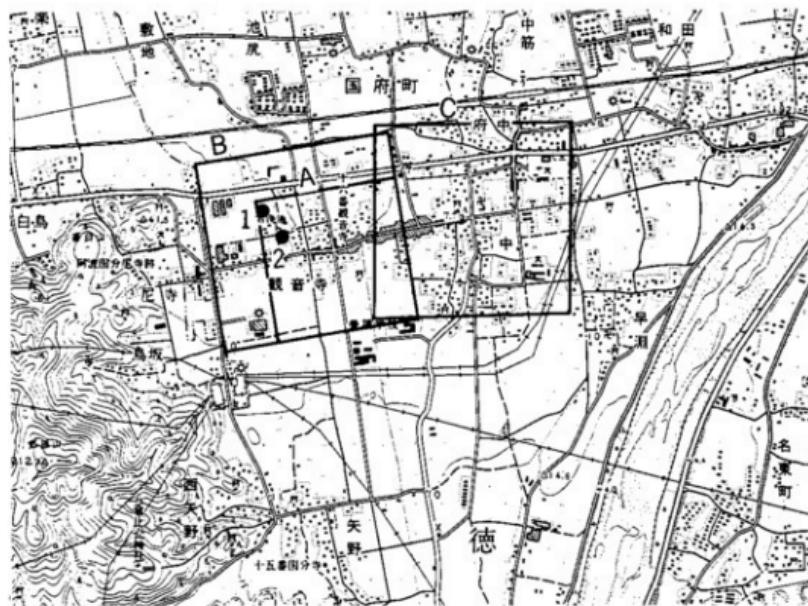
## 図 版 目 次

図版1	溝SD-01~05検出状況（南から）	
	溝SD-02遺物出土状況（南から）	
図版2	溝SD-03遺物出土状況(1)（東から）	
	溝SD-03遺物出土状況(2)（南から）	
図版3	掘立柱建物跡SB-01ほか検出状況（東から）	
	同 上 （西から）	
図版4	柱穴P-18断ち割り状況（西から）	
	柱穴P-48断ち割り状況（南から）	
図版5	溝SD-10遺物出土状況（1）（北から）	
	溝SD-10遺物出土状況（2）（南から）	
図版6	土壙SK-02遺物出土状況（西から）	
	溝SD-08検出状況（南から）	
図版7	溝SD-06, 07, 09, 10検出状況（西から）	
	同 上 （南から）	
図版8	溝SD-07, 08検出状況（南から）	
	溝SD-11検出状況（東から）	
図版9	二反田地区出土遺物（1）	
図版10	二反田地区出土遺物（2）	

## 1. 調査に至る経緯

阿波國府跡は、徳島市の北西部を北流し吉野川に注ぎ込む鮎喰川と、その西方に位置する氣延山との間に形成された沖積平野を地勢とする国府町に所在する。その所在について、明治41年刊の『徳島縣名勝案内』において「國司廳址」として紹介されているが、昭和に至っては政庁の位置あるいは府城推定に関して、田所市太、中井伊與太、福井好行、木下良、藤岡謙二郎、米倉二郎ら諸氏によって諸説提唱されている。これらの説を合わせみると、中字田渕に所在する大御和神社（印鑑社）と大坊（千副寺）をそれぞれ西庁・東庁跡に比定し、この間を南北に継走する道路を中軸線（朱雀大路）として方八町の府域を想定する考え方が最も有力的であった。

こうした前提にたって、1982年度の第1次調査では大御和神社境内において、翌年の第



1. 二反田地区

A 初期国府推定府域 (条里地割 方6町)

2. 神明地区

B 後期国府推定府域 (条里地割 方8町)

C ハ (正方位地割 方8町)

第1図 発掘調査地点周辺地形図 (1 : 25,000)

2次調査では大坊千副寺境内及び周辺部において政府跡の確認に努めた。第1次調査では、<sup>(7)</sup> 堀立柱建物跡2, 井戸1, 溝4, 土壙14などが、第2次調査では堀立柱建物跡1, 溝3, 土壙2などが検出され、土師器, 須恵器, 瓦器, 黒色土器, 陶磁器, 瓦瓶類, 研などの出土を見たが、いずれも政府跡関連遺構として特定するには至らなかった。続く第3次調査は大御和神社の西方約180m (字名「津久田」) の地点で、第4次調査は北方約200m (字名「市ノ窪」<sup>(8)</sup> で「北門」に隣接する) 地点および南西約300m地点で実施したが、ここでも水田遺構と若干の土壙, 溝, ピットを検出したにすぎなかった。以上のような経緯より、第5次調査からは、大御和神社の西方約600mの観音寺周辺域に焦点を移した。

第5次調査は「こうげ」の字名を有する地域を中心に実施し、平安時代後期以降に比定される堀立柱建物跡1と、溝12, 土壙5などが検出されたが、いずれも国府関連遺構としては特定されていない。

こうした状況のなかで翌1987年度には、宅地造成工事に伴う緊急調査を発端に、観音寺373-1 (字名「神明」) の地点で第6次調査<sup>(9)</sup>を実施した。この調査では堀立柱建物跡2 (総柱建物1) と区画溝と思われるものを含め溝10, 墳跡 (柱穴列) 2以上, 井戸2, 土壙5などが検出された。なかでも溝SD-29は土師器の壺・壺蓋・高杯・瓶・壺・甕, 黒色土器, 瓦器, 瓦瓶類, 施釉陶器, 木製櫛, 曲物の蓋, 土錐, 延喜通寶など多彩である。また、墨書「政所」の土師器甕や刻書「大」の須恵器, 石帶なども出土しており、本調査において初めて、国衙跡に関連付けることが可能な遺構の検出をみるに至った。

第7次、8次調査は、6次調査の成果をふまえ、国衙跡の範囲確認に主眼をおいて同じく「神明」で実施し、6次調査地点の北西約200mの観音寺461,464番地における8次調査では、多数の柱穴群を検出し、その性格は不明ながらも重複する5棟以上の堀立柱建物跡を復元した。

以上第8次までの調査を終えた時点で、国衙跡が観音寺を中心とした地域に比定される可能性が強まったと思われるが、依然未解決の問題として残ったのが国府域の把握であった。1988年、県教委が県立国府養護学校内において実施した高畠遺跡の調査において、平安時代の大型建物群とその南側に東西方向に延びる土手状遺構と自然流路の存在が確認されていたが、これらが国府の南限をなす可能性もあるという見解に基づき、第9次調査の一部はここより西方約600mの矢野492-2 (字名「溝添」) で実施した。また同時に、中291-1 (字名「市道」) においても東限の確認を試みるべく調査を実施したが、いずれにおいてもそれらに該当すると思われる遺構の検出には至らなかった。



第8次調査地区

0  
100m  
1 : 2,000

二反田地区

神明地区

第2図 調査地位置図

こうした経緯でむかえた最終の第10次調査は、いまだ確証のない政府跡あるいは国衙跡の一角と、現在方6町で条里地割に一致させて推定している初期国府跡の西限あるいは北限の一端を確認することを目標として実施した（第1図）。

## 2. 調査の概要

### （1）二反田地区の概要

本調査地は、国府町觀音寺 623-1,624-1にあたり「二反田」の字名を有する。前述した方6町推定府域の北西隅付近に該当し、西限または北限を示す遺構（たとえば築地跡やそれに付随する側溝）の検出に努めた。調査は、地区内を軸方向任意で5m西方のグリッドに区画し、それに沿うかたちで三ヵ所の発掘区を設定し、それぞれI区、II区、III区と仮称した（第3図）。発掘面積は合計400m<sup>2</sup>である。

#### i) 層序

本調査地は水田休耕地で、現地表面で海拔T.P.+6mを測る。層序は、上層より①現代耕作土、②旧水田耕作土（4~5枚）、③暗茶褐色混じり黄褐色弱砂質シルト層、④明黄褐色粘質シルト層（地山）となっている。③層は第1遺構面をなす。④層は第2遺構面をなす可能性があり、上面で海拔T.P.+約5.6mを測る。本調査地は水吐けが悪く、周囲からの水の染み出しが著しいといった現状である。

#### ii) 検出遺構・出土遺物（第3,6,7,8図、図版9,10）

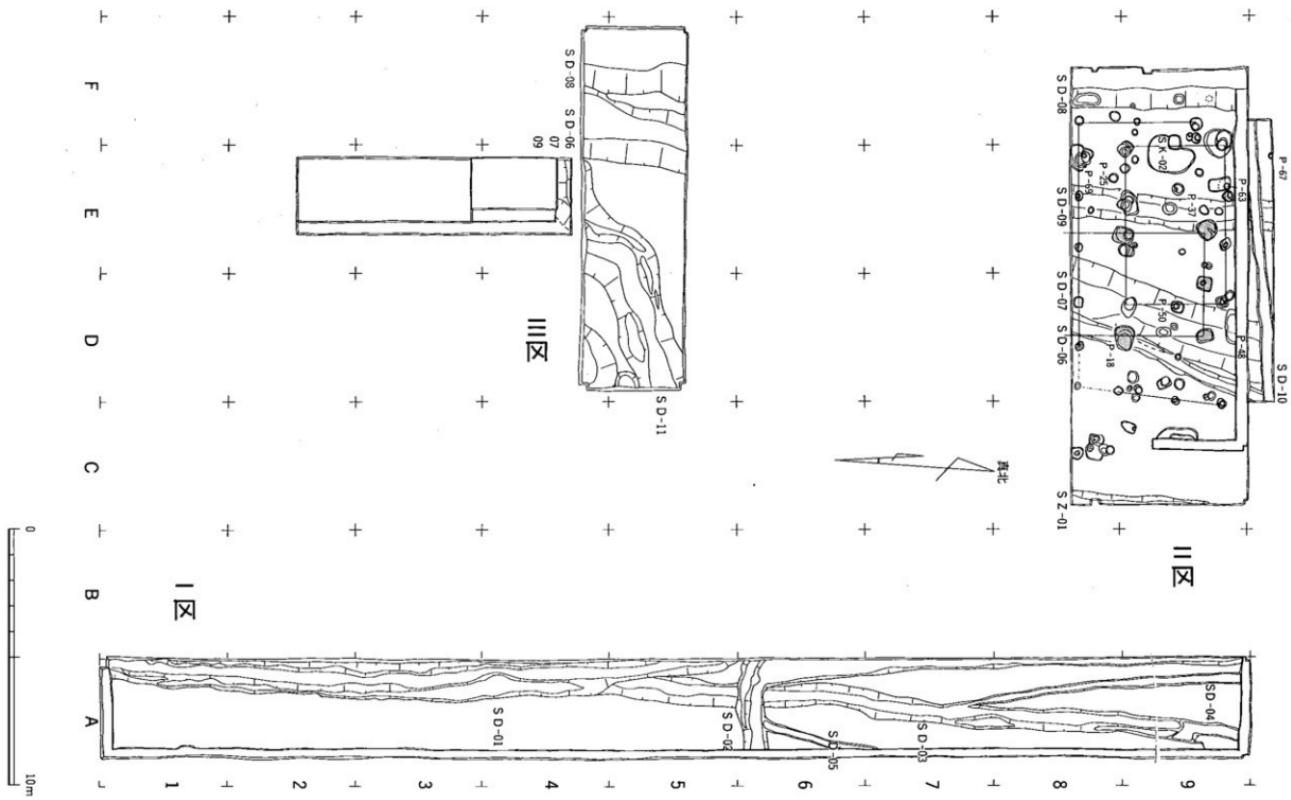
本調査地で検出されたおもな遺構・遺物は、以下概略のとおりである。

##### 溝SD-01,02,03,04,05（図版1,2）

いずれもI区明黄褐色シルト層上面で検出された。SD-02は途中で東に向きを転じるが、他はほぼ南北方向の溝であり、SD-01が推定幅約2mで深さ45cm前後を測るほかはいずれも10~20cmの深さをとどめるにすぎない。SD-01は、橙灰色粘質の水田土壤を埋土とし、土師器の羽釜(1)、壺(2)、椀(4)、須恵器の甕(3)、壺蓋(5)、皿(6)、椀(7)、壺(8)などの破片を包含する。SD-02~SD-05もいずれも水田土壤を埋土とし、SD-02から土師器壺(9)、SD-03から高台を持つ壺(11)、把手付き鍋(15)、SD-04から須恵器壺底部(14)などが出土している。これらの溝は、切り合い状況から〔SD-03, SD-04〕→〔SD-02, SD-05, SD-01〕の推移が看取されるが、ある時期の水田耕作によって埋没したと考えられる。

##### 掘立柱建物SB-01, SB-02（第4,5図、図版3）

II区第1遺構面（暗茶褐色混じり黄褐色弱砂質シルト層）においてピット約70基が検出され、2棟の掘立柱建物跡を確認した。



第3図 二反田地区遺構配置図

SB-01は桁行3間×梁行2間の小規模な東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、南桁行が西から2.0-1.8-2.0m、北桁行が西から2.0-1.8-2.2mで、東梁行が北から1.8-1.8m、西梁行が約1.9m等間を測る。柱穴掘形の平面形は、基本的には一辺40-50cmの正方形あるいは長径40-50cmの歪な円形を呈するが、北西-東西の対角をなす柱穴は、長径約80cmを測り、長軸が身舎中心部を向く。各柱穴の深さは30-50cmを測る。柱穴内出土遺物は、土師器壺(44; P-42出土)、須恵器壺片など若干である。

SB-02は桁行2間以上×梁行2間の南北棟の掘立柱建物跡である。SB-01とは主軸方向が直交するかたちで重複するが、柱穴の切り合いがないため新旧関係は不明である。柱間寸法は、桁行が東西ともに約3m等間、北梁行が約2m等間を測る。柱穴掘形は、平面形が長軸60-90cmの方形状を呈する比較的大規模なものであり、深さは30-50cmを測る。P-18には、柱材が遺存していた(図版4;上)。

#### 柱穴P-48(図版4;下), 63, 69

II区第1遺構面で検出された柱穴で、いずれも掘立柱建物SB-02の柱穴P-18同様、規模が大きく柱材を残す。SB-02関連建物のものであろうか。P-63からは土師器壺(35)が出土地している。

#### 柱穴P-11

径70cm、深さ45cmを測る。土師器壺(33)、須恵器高台付き壺(45)が出土している。

#### 柱穴P-25

径35cm、深さ25cm。土師器高台付き壺(36)が出土している。

#### 柱穴P-37

径40cm、深さ50cm。須恵器壺口縁(41)が出土している。

#### 柱穴P-50

長径55cm、短径35cm、深さ40cm。須恵器壺(43)が出土している。

#### 柱穴P-67

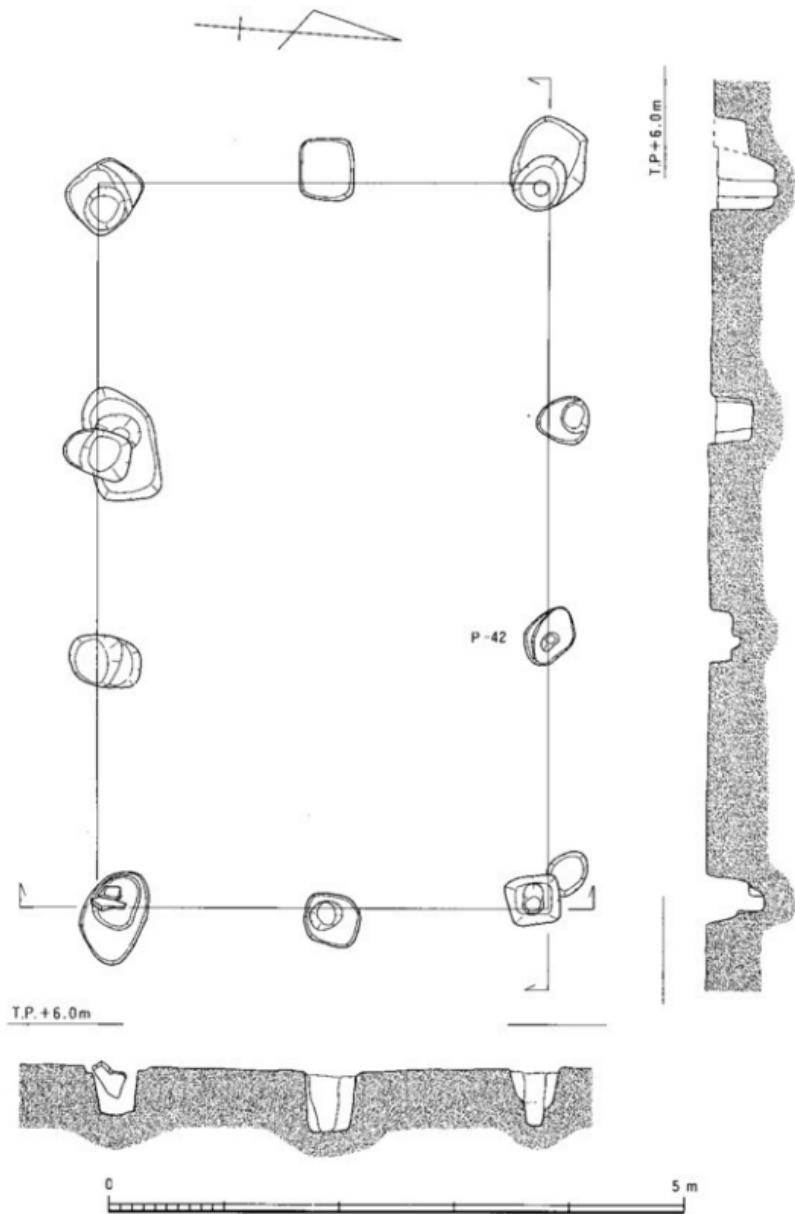
径35cm、深さ35cm。「面取り」を施さない土師器高台付脚部(38)が出土している。

#### 土壙SK-02(図版6;上)

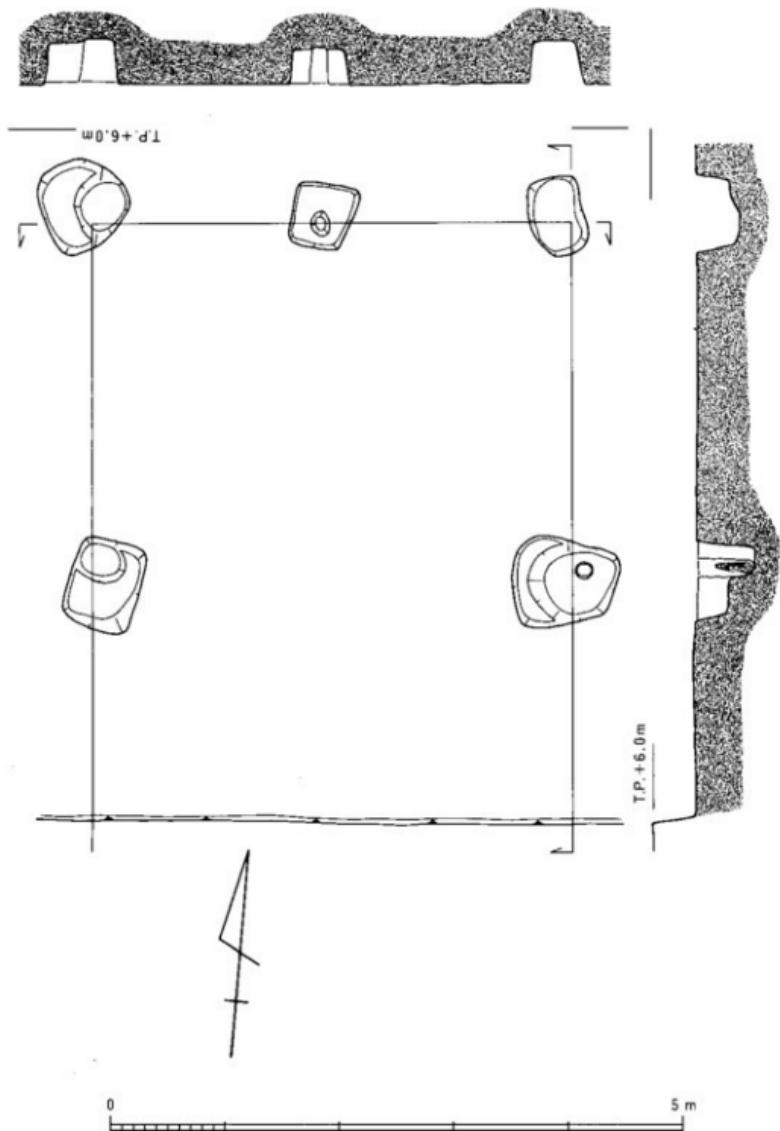
II区第1遺構面で検出された長径1.8m、短径1.2m、深さ約10cmを測る土壙。土師器鍋(29)、壺蓋(30)、壺(31)が一括出土している。壺蓋(30)は外面に、壺(31)は内面に丹彩を施しており、いずれも端部内面に沈線を巡らす。

#### 柵列SH-01, 01, 03(図版3)

II区南端で、東西方向に全長8.75mで4間(SH-01)、その西端で北向きに直交する全長4.5mで2間(SH-02)の柱穴列を検出した。柱間寸法は1.5m~3mとばらつきがある。



第4図 摺立柱建物 SB-01



第5図 掘立柱建物 SB-02

SB-01, SB-02に見られるような建物柱穴に比べて規模が小さく、SB-01に付随する塙の存在を想定したが、SH-01は調査区外に存在する建物の北桁行もしくは底に該当する柱穴列の可能性もある。SH-03は掘立柱建物跡東側で検出された柱穴列であるが、建物の方向と約15度のずれを見せ、SB-01, SB-02との関連性は薄いと思われる。

#### 溝S D-10 (図版5)

掘立柱建物SB-01の北側で検出された幅40~60cm、深さ40cm前後を測る東西方向の溝である。同建物に付隨する溝の可能性を有する。遺物は、土師器では把手付き鍋(16)、壺蓋(17)、壺(18~20)、高台付き壺(21)、甌(22)、把手付き短頸壺(23)が、須恵器では甕(24)、壺(25)、高台付き壺(26)、平瓶もしくは壺(27, 28)が造構内一括で出土している (図版5)。壺蓋(17)および壺(18~20)はいずれも内外面に丹彩の痕跡をとどめる。須恵器甕(24)の体部外面は、平行叩き目を水平方向に施した後に斜め方向に施しており、底部にはさらにカキ目を施す。

#### 溝S D-06, 07, 08, 09 (図版6; 下, 7, 8)

いずれもII区では第1造構面(③層)で検出され、旧水田土壤の堆積が厚く③層が存在しないIII区では、④層面において検出された。本来④層面の時期に機能していた溝が、③層堆積後に至るまでその痕跡をとどめたものである可能性もあり、また切り合い関係より、B区の掘立柱建物およびSD-10に先行することなどから、第2造構面として捉えた。

SD-06は、北東ー南西方向の溝で幅50~80cm、深さ25cmを測る。暗茶褐色砂質シルトを埋土とし、若干の土師器片を包含する。C区ではSD-07埋土を切り重複するかたちで検出された。

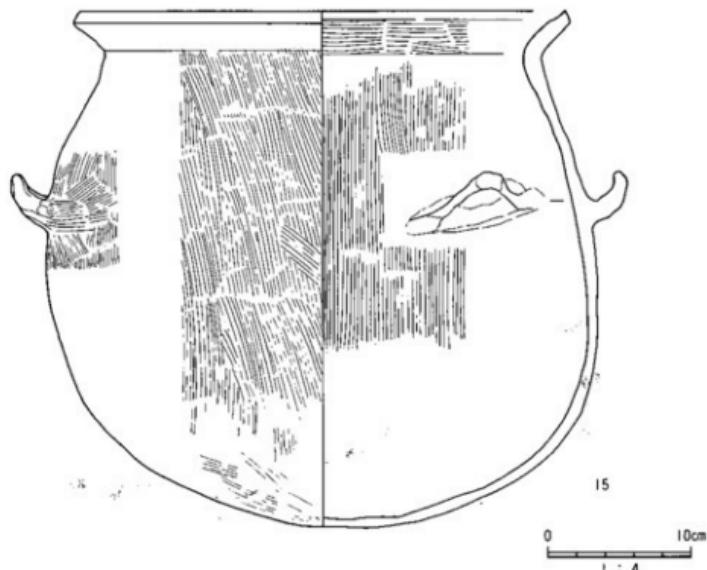
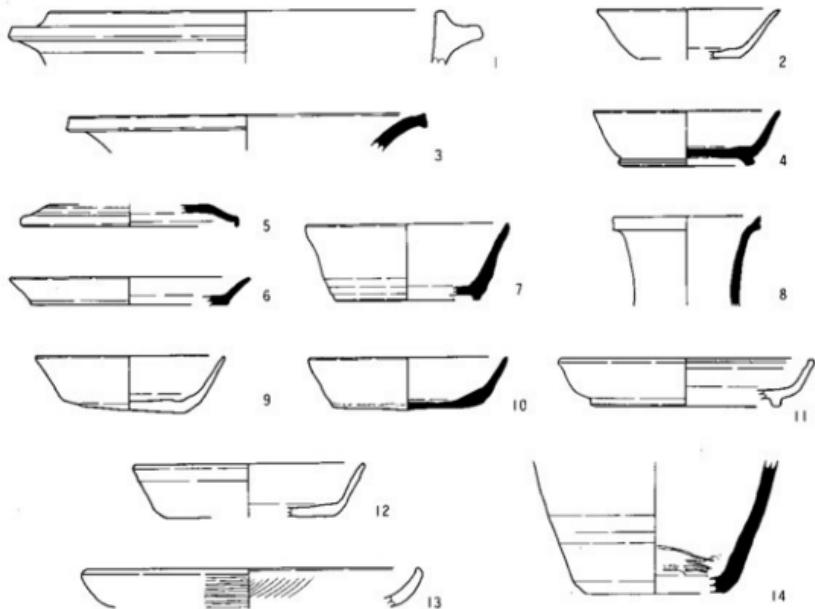
SD-07も北東ー南西方向の溝で、幅2.25m前後、深さ約80cmを測る。埋土は砂質シルト層(上層)と細砂質(下層)に大別される。少量の土師器壺片と、底から大型蛤刃石斧の欠損品1点が出土している。SD-06に先行する。

SD-08は条里地割に一致する南北溝である。西半部は調査区外であり、推定幅3~4m、深さ50~70cmを測る。埋土はSD-07同様砂質シルト層と細砂層に大別される。遺物は、外面に横方向のヘラみがき、内面に斜め方向の放射状暗文を施す土師器壺片(13)などが少量出土している。III区において見られた切り合い関係により、SD-07に後続する溝である。

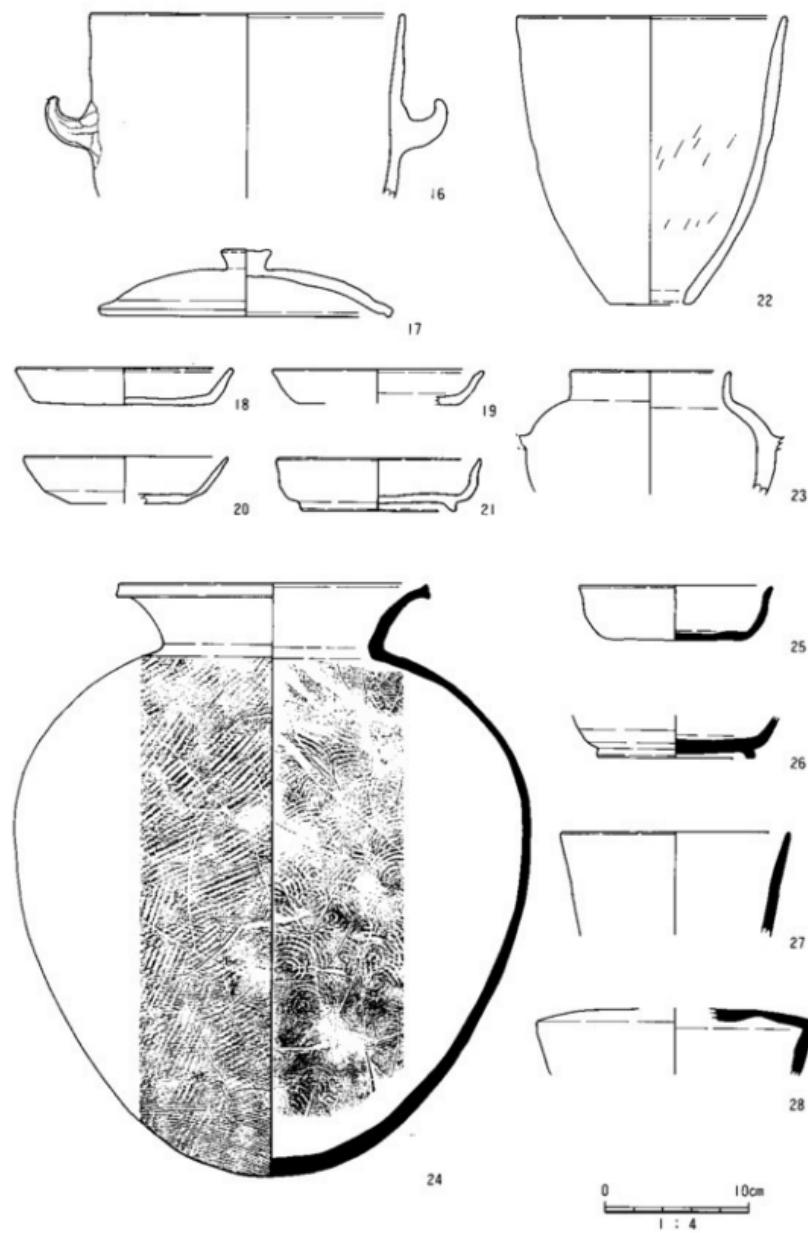
SD-09は、幅約1.5m、深さ約60cmを測る南北溝である。埋土にSD-07との類似性がみられ、またIII区に至るまでの間で合流している可能性が強く、おそらく同時存在の溝であろう。出土遺物は僅少である。

なお、これらの溝を中心に土鍤の出土も少なからず見られた (図版10; 下段)。

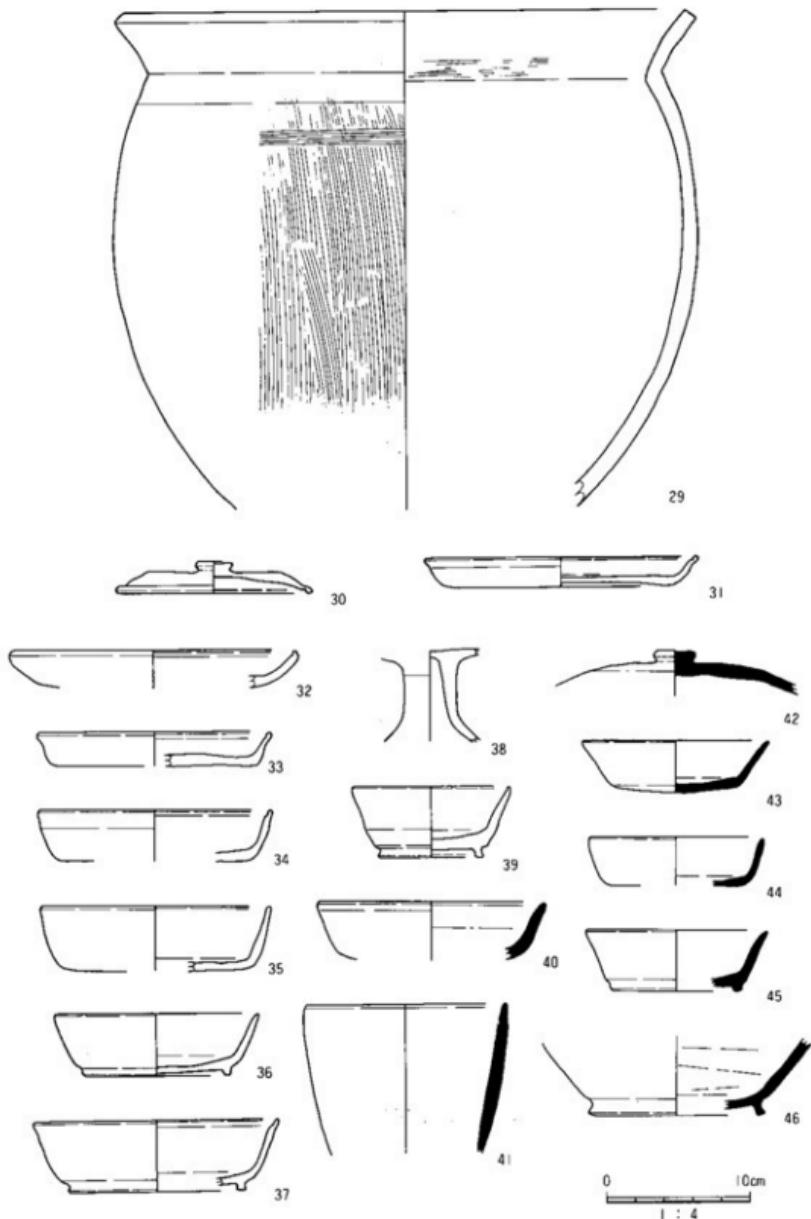
#### 溝S D-11 (図版8; 下)



第6図 二反田地区出土遺物(1)



第7図 二反田地区出土遺物（2）



第8図 二反田地区出土遺物（3）

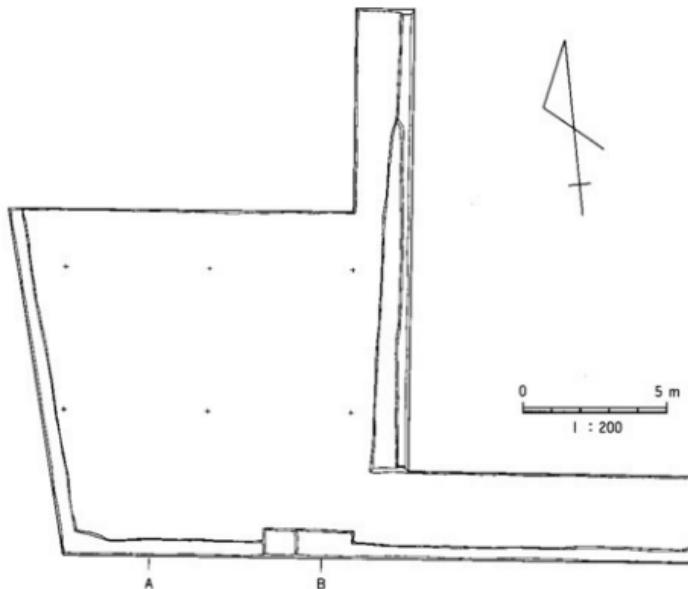
C区で検出された南西-北東方向に蛇行する幅2.0~2.5m、深さ約1.4mの大溝である。弥生時代終末~古墳時代初頭頃の溝で、土師器甕等の破片が出土した。性格は不明。

## (2) 神明地区の概要

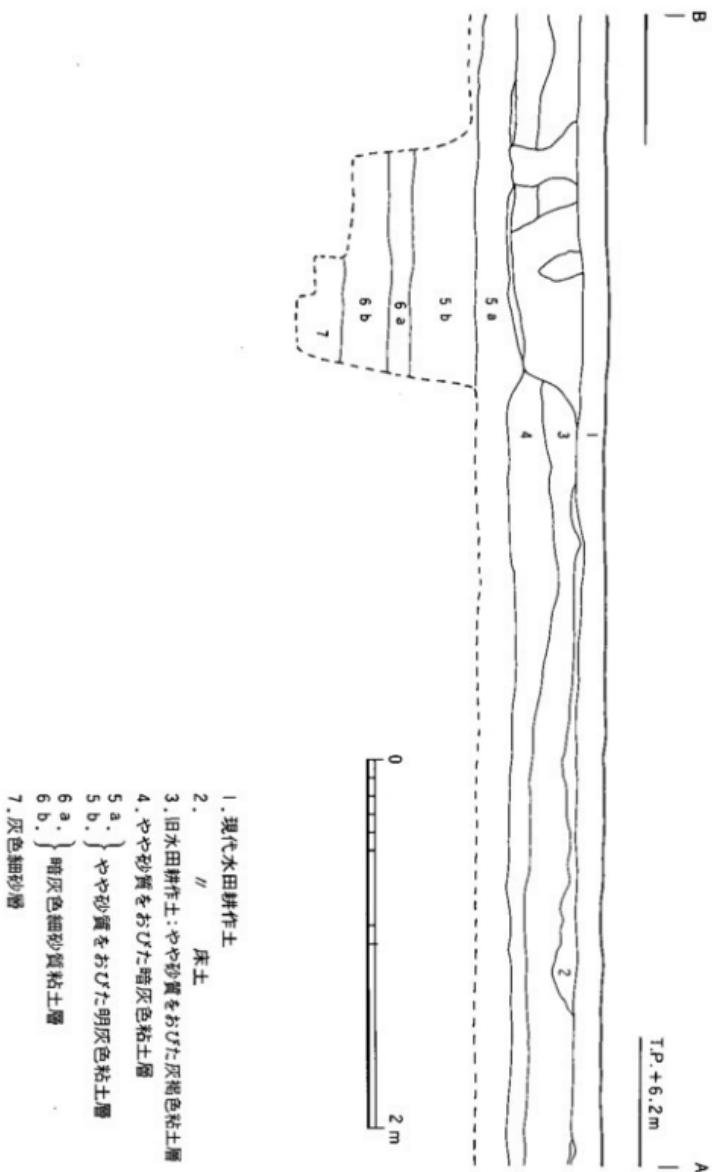
本調査地は観音寺466-1にあたる。第8次調査神明地区で検出された掘立柱建物跡群の拡がりを確認することを目的に、8次調査地点の北西約20mの地点で200m<sup>2</sup>を対象に実施した(第2図)。

地目は水田で海拔T.P. + 6mを測り、現地表面では二反田地区とほぼ同レベルである。

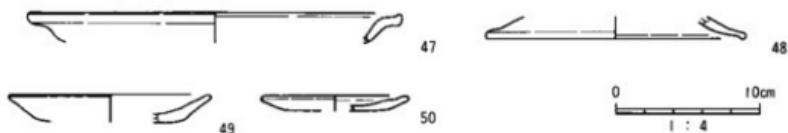
調査は現耕作土を除去した後、調査区内の東西南壁沿いにトレーニングを掘り、土層堆積状況を確認した。基本層序は第10図に掲げたとおりであるが、結論を先述すれば、いずれのトレーニングにおいても造構および造構面を成し得そうな安定したベース層は確認されなかつた。4層以下7層の砂層に至るまでは、いずれも粘質土壤の堆積層で、特に5層では植物



第9図 神明地区調査区概略図



第10図 神明地区トレンチ土層概略図（部分）



第11図 神明地区出土遺物

の根茎痕が顕著にみられ、沼地状の低湿地を連想させる土壤堆積をなしていた。なお湧水が著しく、その上限は5a層上面ラインまで達する。こうした状況であったため、調査区内での造構検出は不可能と判断し、トレンチ調査のみにとどめた。

ただし遺物の混在は認められ、6a, 6b層を中心に土師器壺(49), 壺蓋(48), 大皿(47), 小皿(50)や須恵器鏡片、平瓦片が僅かに出土している。(第11図)。壺蓋(48)は内外面丹彩、小皿(50)は底部ヘラ切りである。

当地の地形を見ると、調査区北東に位置する「舌洗の池」に向かって用水路が分流し、条里に幾分の乱れが生じている。舌洗の池には、元暦2年(1185)、敗走する平氏を追って阿波に上陸した源義経が、当地でしばしの休憩をとり馬に水を飲ませたという伝説が残っているが、この伝説を考慮するなら少なくとも12世紀後半にはすでに舌洗の池が存在しており、今回の調査からみても、当時(おそらくそれ以前から)本調査地が「舌洗の池」の一端あるいは当地にそそぎこむ流路のなかに位置していた可能性が強い。しかし、8次調査で確認された造構群との相関性などについては不明である。

### 3. 小結

今回の調査の主たる目的は、最初にも述べたように、初期国府跡(推定)における政庁の位置付け及び府域西限あるいは北限ラインの確認であった。

二反田地区で検出されたSD-06～SD-09の溝のうち、SD-08のみが条里方向に一致しており、またII～III区において検出されていることからかなりの距離にわたって延びていることが想定され、その推定幅などからも比較的規模の大きな区画溝と思われる。この溝に明らかに付随すると思われる造構の存在などは確認されなかったが、国府域の西限に位置する溝である可能性も指摘される。

掘立柱建物跡SB-01, 02およびその他の柱穴跡については、墨書き器などの文字資料が存在しないため性格の詳細は不明であるが、東側I区ならびに南側III区での柱穴跡の検出が

皆無であったことから、孤立的存在の建物であった様相が窺える。政府域周辺部における雑舍的（？）な建物の在り方の一例としてとらえることができよう。

これらの遺構の時期についてはSD-10出土土器が示すところであり、「平城宮期」に位置づけられるものである。このことからも当地域が初期国府跡の一端に位置づけられる可能性が強いと思われる。

神明地区については前述概要のとおりであり、国衙跡等の国府中心部に関連づけられる諸相の把握には至らなかった。

しかし第6次「神明地区」調査の成果と周辺地形から、やはり国衙・政府は観音寺字神明および居屋敷を中心とした地域に位置していたと考えたい。つまり6次調査における「政所」の文字資料と、地形については周辺部と比較した場合、該地域が最も高い海拔を有している（二反田地域とは遺構検出面レベルで+80cmの比高差が存在する）ことを根拠とし、16番札所「観音寺」の西側を南北に走る道路「観音寺西部線」を国府の中軸線に比定しようとするものである。そして今回二反田地区で検出された溝SD-08を西限ラインの溝と仮定すれば、方6町域の国府の存在が有力性を帯びてくる。

ただし出土土器から見れば、6次調査で検出された遺構は概ね10世紀以降に比定され、9世紀初頭を遡る年代が与えられる遺物はおもに遺構外のものとして散見されたにすぎない。そして今回の調査では、遺物の出土量は少ないものの主としてその逆の状況が認められた。したがって方6町域の国府を想定したとしても、それを初期のみあるいは後期のみの範疇に属するものとして判断することが不可能であるのが現状である。

こうした状況については、当地周辺部での調査例が少なく検出遺構数も十分でないことや、調査地点の選定に一貫性が欠けていることなどから、個々の調査成果の関連性の掌握が困難を極めているが、国府の存続期間あるいは移転に係わる問題として、方8町域の国府跡の存在についても考慮しながら検討していくなければならないであろう。

## 註

- (1) 田所市太「阿波国分寺」(『国分寺の研究』下巻) 1938
- (2) 中井伊與太「阿波國府址」(徳島毎日新聞昭和13年新年號, 田所市太『四国の国府』) 1938
- (3) 福井好行「阿波の国府と其附近の条里」(『徳島大学学芸学部紀要』第9) 1959
- (4) 木下 良「国府と条里との関係について」(『史林』50巻 5号) 1967
- (5) 藤岡謙二郎『国府』(吉川弘文館) 1969

- (6) 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」(『史林』66巻 1号) 1983
- (7) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第1次調査概要－1982年度－」1983
- (8) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第2次調査概要－1983年度－」1984
- (9) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第3次調査概要－1984年度－」1985
- (10) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第4次調査概要－1985年度－」1986
- (11) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第5次調査概要－1986年度－」1987
- (12) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第6次調査概要－1987年度－」1988
- (13) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第7次調査概要－1988年度－」1989
- (14) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第8次調査概要－1989年度－」1990
- (15) 徳島県教育委員会「徳島県立国府養護学校プール建設工事に伴う高畠遺跡発掘調査概要報告書」1990
- (16) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第9次調査概要－1990年度－」1991
- (17) 徳島市市史編さん室「徳島市史」第1巻 総説編 1973

# 図 版



溝 SD-01~05 検出状況

(南から)



溝 SD-02 遺物出土状況

(南から)

図版 2



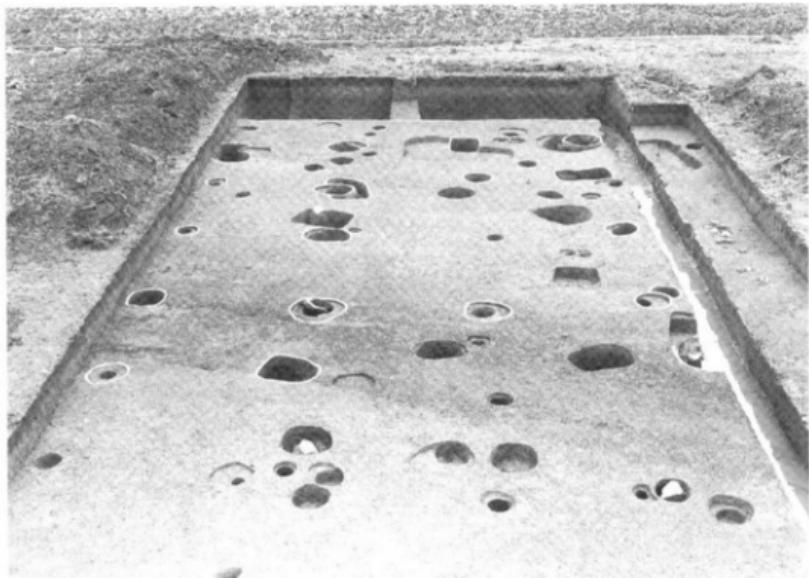
溝 SD-03 遺物出土状況(1)

(東から)



溝 SD-03 遺物出土状況(2)

(南から)



掘立柱建物跡SB-01ほか検出状況

(東から)



同

上

(西から)

図版 4



柱穴 P-18 断ち割り状況

(西から)



柱穴 P-48 断ち割り状況

(南から)



溝 SD-10 遺物出土状況(1)

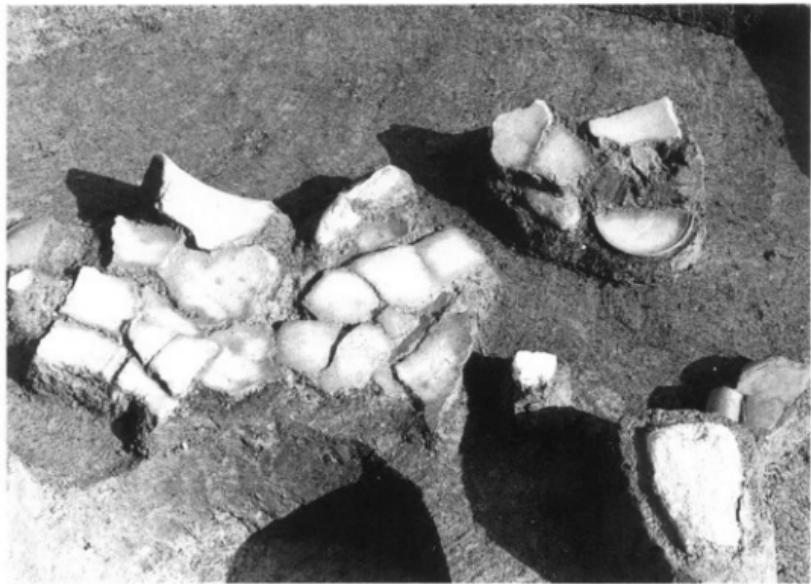
(北から)



溝 SD-10 遺物出土状況(2)

(南から)

図版 6



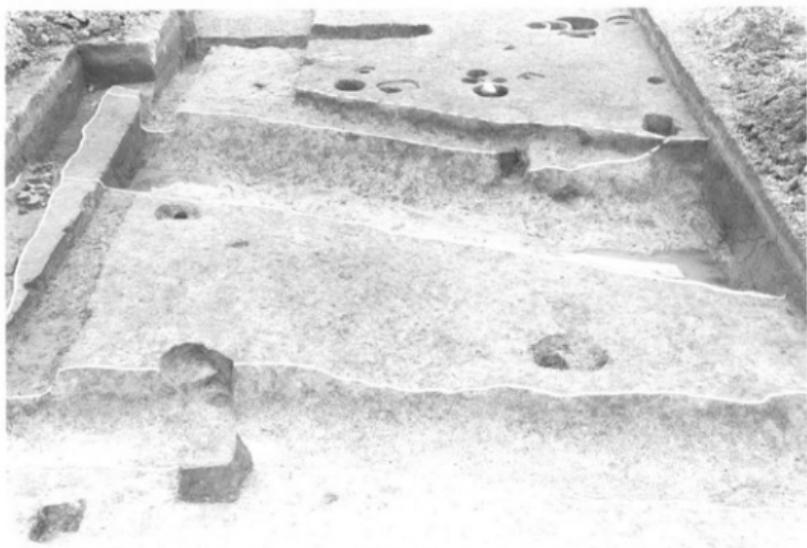
土壤 SK-02 遺物出土状況

(西から)



溝 SD-08 検出状況

(南から)



溝 SD-06, 07, 09, 10 検出状況

(西から)



同

上

(南から)

図版 8



溝 SD-07, 08 検出状況

(南から)



溝 SD-11 検出状況

(東から)



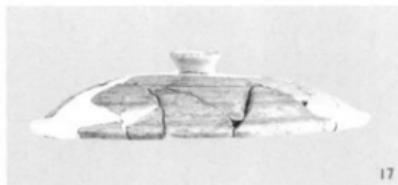
24



22



16



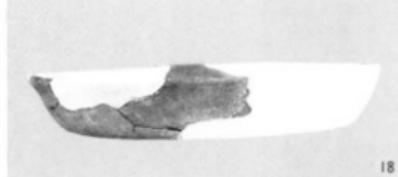
17



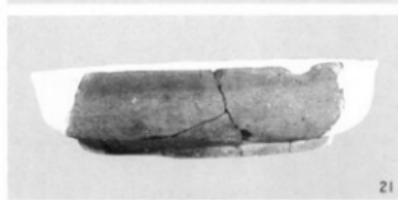
25



23



18



21

二反田地区出土遗物(1)



29



30



31



4



15



9



10



二反田地区出土遺物(2)

## 阿波国府跡第10次調査概要

— 1991年度 —

平成4年3月31日

編集 徳島市教育委員会社会教育課

発行 徳島市教育委員会

印刷 株式会社 芳川堂印刷所